

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に [7]

キケロ『友情論』より — 分詞と冠詞 —

秋山 学

今月は、ふたたびキケロ『友情論』からテキストを選ぶことにしましょう。ちょうど半年前にこの連載を始めましたが、初回と同じ著作からの引用です。

原文 Cumque plurimas et maximas commoditates amicitia contineat, tum illa nimirum praestat omnibus, quod bona spe praelucet in posterum nec debilitari animos aut cadere patitur. Verum enim amicum qui intuetur, tamquam exemplar aliquod intuetur sui. Quocirca et **absentes adsunt et egentes abundant** et imbecilli valent et, quod difficilius dictu est, mortui vivunt; tantus eos honos, memoria, desiderium prosequitur amicorum. — *De amicitia* VII 23.

仏訳 L'amitié présente donc des avantages particulièrement nombreux et importants, mais elle les surpasse tous à elle seule, en inspirant un doux espoir qui illumine l'avenir et en ne laissant les âmes ni s'affaiblir ni succomber. Car celui qui a devant les yeux un ami véritable a devant soi comme sa propre image idéale. Dès lors les absents deviennent présents, les pauvres riches, les faibles forts et, ce qui est plus difficile à dire, les morts sont vivants : tant ils inspirent d'estime, de souvenirs, de regrets à leurs amis.

訳 友情は極めて多くの、そして極めて大きな快適さを秘めているばかりでなく、間違いないくすべてに優る。なぜなら友情は、美しき希望とともに後世に輝きを放ち、かつ精神が弱ったりくじけたりすることを許さないからだ。というのも実際、友人に思いをはせる者は、言わば何か自分にとっての規範を見つめるかのごとくに、彼に思いを致すのだ。友情が介在するところでは、不在の人々が現前し、物に事欠く人々が満ち足り、力を失った人々が力を得、さらには、語るには困難にすぎるが、この世を去った人々が生きているからだ。友人への敬意、友人をめぐる記憶、友人に対する追憶は、かくも強い力で人々に相伴うのだから。

今回考えてみたいのは、ラテン語構文における、品詞の相違とそれに関わる諸問題です。こう述べただけでは、何のことかまだはっきりしないと思いますが、この問題

が特に大きな意味をもって現れるのが「分詞」を用いた構文であると言えるでしょう。

上に掲げたテキストでは“absentes adsunt”および“egentes abundant”という文にそれぞれ現在分詞形が一つずつ登場しています。まず absentes という語形は、動詞 absum「不在である」(不定詞は abesse)の現在分詞形男性複数主格、一方 egentes は動詞 egeō「事欠く」(不定詞は egere)のやはり現在分詞形男性複数主格です。上掲の訳文では、この部分を①「不在の人々が現前し、物に事欠く人々が満ち足り」と訳しましたが、②「たとえその人がそこに居合わせなくとも現前し、たとえその人が事欠いていようとも満ち足り」と訳することもできるでしょう。

ちなみに仏訳では“les absents deviennent présents, les pauvres riches”となっていて、これは上の①の訳に近いと言えます。ラテン語には冠詞が存在しないのに対しフランス語では、ラテン語の指示代名詞(指示形容詞)起源の定冠詞がありますので形容詞に定冠詞を付すことにより、形容詞が名詞化して「～なる人々」という意味を表すことができます。ラテン語でも形容詞は名詞化され得ますが、フランス語は冠詞を用いてこの点をよりはっきりさせることができるわけです。

ところで上記の訳文②は、「たとえ～」という「譲歩」の意味を汲んだ訳文になっています。「譲歩」とは、「従属節+主節」構造における「従属節」のうち、いわゆる「副節」の表す意味内容の一つであり、「副詞節」とは「譲歩」のほか「原因・理由」「条件」「時間」「付帯状況」などを表しながら、主節の定形動詞を副詞的に修飾する従属のことですね。この従属節にも、かならず定形動詞が含まれることに注意したいと、います(②の「居合わせ(ず)」と「事欠いて」)。ちなみに「従属節」としては、「副詞節」のほかに「名詞節」(「～ということ」で置き換えられる節)および「形容詞節」(「関節」とも呼ばれ、先行する名詞を修飾する節)がありますね。

つまり上掲のラテン語例文では、「副詞節」に含まれる定形動詞を書き換えた形として「分詞」が用いられているということが言えます。「分詞」とは「動詞から派生し形容詞」ですから、動詞的な意味を内包するものの、品詞自体がすでに形容詞化しているため、われわれはついその語形に影響されて、しばしば形容詞的な意味を汲み取って満足してしまいがちです。けれども時には、そして往々にして、元来その分詞が発点点としている動詞の意味合いを汲み取り、その動詞が副詞節中の定形動詞として置かれている場合のような訳し方をすれば、非常にダイナミックな表現になります。上記の②の場合がそれに当たりますが、これは、簡潔さを旨とした仏の訳調とは一味違う、動的な訳文だと言えるでしょう。「動詞形容詞」としての分詞は、このように品詞構造に関わる奥深さが潜んでいるのです。

(あきやま・まな)